

ワンダフルな毎日

会員　松本 甚之助（59 期）

40年ぶりに犬を飼っている。

最初に犬を飼ったのは小学生のころだった。ところが、その犬は家に来てわずか1週間で死んでしまった。買った時から病気だったらしい。僕はたった1週間しか一緒にいなかったのに、相当悲しかったようで、大泣きしたと聞いている。ところが、そのときのことを僕自身はまったく覚えていない。ただ、悲しい記憶が残っていたのだろう。それ以来、犬を飼おうと思ったことは一度もなかった。

そんな僕に転機が訪れた。子供が「犬を飼いたい」と言い出したのである。妻も実家で犬を飼っていたため、気がつけば賛成派が多数。しぶしぶブリーダーのところへお財布係として連れていかれた。車の中では何度も念を押した。

「今日は見るだけだからね。絶対に買わないからね」

ところが到着すると、そこには小さな子犬が、おもちゃと戯れながらコロコロ転がっていた。見た瞬間、心を撃ち抜かれた。「この子、連れて帰りたい」。さっきまで「見るだけ」と連呼していた男はどこへ行ったのか。40年前の悲しい記憶も、そのかわいさの前ではあっさり退散。その場で契約し、お財布係としての役目を自ら果たした。

犬を欲しがったのは子供なのに、名前を考えたのは僕。甘がみや無駄吠えをしないようにしつけ、お手もお座りも教えた。気づけばすっかり教育係である。ただ、トイレだけはなかなかうまくいかなかった。

さらに社会性を身につけさせようと、もう一匹同じ犬種のワンちゃんを今度はペットショップで迎えた。すると驚いたことに祖父が共通だった。犬の世界も意外と狭い。ちなみに祖父の名前はGacktである。

ただし性格は正反対。長男犬は慎重派で、何をするにも恐る恐る。でも犬のこととなると人（犬か）が変わる。相手がおののくらいのテンションで遊びに行くのだ。



次男犬は後先を考えず、高いところに上っては降りられなくなり、助けを求めてくる。そして犬より人間、特に女性が大好き。犬の幼稚園でも、女性トレーナーさんに抱っこされて満足そうにしている。女性に愛想がよかった祖父が亡くなった年に生まれたので、祖父が生まれ変わったのではと家族では話している。そして、トイレは教えていないのに完ぺきにこなす。

最近では旅行先を選ぶ基準まで変わった。国内旅行なら犬連れOKのところ。昔に比べて犬と泊まれるホテルもずいぶん増えたらしい。我が家の旅行計画は、完全に二匹中心である。

そして犬を飼ってよかったと思う瞬間がもう一つある。反抗期真っ盛りの長男が、「かわちー」と高い声で犬をなでるのだ。親には文句ばかり言っているのに、犬には満面の笑み。そんな姿を見ると、「ちゃんと優しいところも残っているな」と少し安心する。

40年前には、もう犬を飼うことはないと思っていた。それが今では、二匹の犬が中心。仕事をするときにも膝の上に犬がいる。出費も増えたし、世話も増えた。それでも家族の会話と笑顔も増えた。

「犬は飼わない」と言っていた自分が、今ではすっかり犬のいる生活を楽しんでいる。人生、何が起こるか分からない。

我が家は今日も、文字どおりワンダフルな毎日である。